

特集

北海道のアマチュア写真文化 の向上に貢献 写真道展を主催する 北海道写真協会

シリーズ「北海道の天然記念物」③ …… 佐呂間湖畔鶴沼のアッケシソウ群落〔湧別町〕

ほっかいどうの本 …… 『北海道新聞が伝える 核のごみ 考えるヒント』 …… 北海道新聞社
『熊から造形へ 木彫り熊 未知なるコトで独り言』 …… 熊学舎
『おいしく つくろうよ』 …… 共同文化社

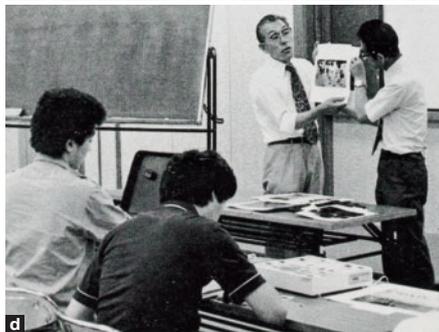
北海道のアマチュア写真文化の向上に貢献

写真道展を主催する 北海道写真協会

終戦から7年後の1952年、食べることに追われて趣味や文化にまで手の届かない時代に、アマチュア写真界の発展を目的に、北海道写真協会(以下、道写協)は発足しました。2021年9月現在、全道に30支部を持ち、会員数337人を擁する全国有数の規模を誇る写真団体です。来年6月1日の「写真の日」に創立70周年を迎えます。写真という共通の趣味を通じて知り合った会員たちは、励まし合いながら撮影技術を研鑽し、毎年「写真道展」を開催するなど、写真文化の向上に大きな功績を残しています。中野潤子会長はじめ道写協の皆さんに活動状況などを伺いました。

(文・片山健一 取材日2021年9月17日/写真提供:北海道写真協会)

- a 1回展のリーフレット
- b 膨大な応募作品は地方審査も行われていた(18回展)
- c かつては東京で著名な写真家による最終審査を行っていた(22回展)
- d 1981年6月に開かれた写真講座の様子



道内最大の公募展 「写真道展」を主催

道写協には、全道各地の若い人から高齢者まで、熱心なカメラファンが集まっています。このうち道写協会員は、道内最大の公募展である「写真道展」(北海道新聞社共催)に向けて感動を伝える「写真づくり」に日々励んでいます。

この事業は、四季の変化が豊かな

北海道で、自然の中に息づく動植物のたくましい生命力、北の風土に暮らす人々のひたむきな姿などの一瞬が活写され、四隅まで無駄なく計算され尽くしたフレーミングの作品が並ぶ、魅力あふれる展覧会です。

一般公募は第1部「自由」、第2部「観光・産業」、第3部「ネイチャーフォト」の3部門のほか、高校生・大学生らを対象とする第4部「学生」があります。

2021年に開かれた68回展は、一般公募に出品できる一人当たりの作品数を各部門10点以内から5点以内としたため応募点数は3161点と前年に比べ4割ほど減少しましたが、応募人数は361人と、長引く新型コロナウイルス禍にもかかわらず約1割減にとどまりました。第4部は、約1割減の354人からの応募で、出品数は約7%減の789点でした。

2月27日と28日に審査会を実施し、第1部から第3部で270点、第4部から36点の入賞・入選をそれぞれ選出しました。5月11日から16日まで札幌市民ギャラリーで開いた展覧会には、延べ1000人を超える人が足を運びました。

会員が、「写真道展」で一定回数の入賞や入選を重ねると「写真道展会友」に昇格します。「写真道展審



道写協の現役員

前列左から 藤田祐理さん（事務局）、中野潤子さん、香取征子さん、奈良美弥子さん
後列左から 中西 勉さん、田本 實さん、西澤 實さん、小関草太さん（事務局）

査会員・会友作品展」に出品できるようになった会友の中から、作品展などの入賞経験や個展開催実績に基づいて「写真道展審査会員」に選出されます。審査会員は、写真道展の審査を務める立場になります。9月時点の会員構成は、会員236人、写真道展会友63人、写真道展審査会員38人です。

2003年の50回展から審査を担当している中野潤子会長は、「写真

に絶対的価値はありません。多人数で評価すると、時に平均的で平凡な作品が選ばれることがあり、逆に少人数では、審査員の個性が出すぎて客観性を欠くこともあります。審査は本当に難しいものです」と言い、審査会員を2班に分けて、隔年交代で審査を行っています。

道写協は今年度の総会で、写真道展で規定の入選回数に達した会員は、写真道展に応募できない「会友」に自動昇格するよう規約を改正しました。その理由について、中野会長は「新鮮で輝かしい感性を持った新人の登場を願うことです」と説明し、次回の写真道展には「新たな才能が現れ、新風を吹き込んでほしい」と期待を寄せます。

どのような時代になるうが 変わらぬ入選の喜び

「写真道展」は、本道で初めてとなる写真の公募展として北海道新聞事業部が企画し、道写協が発足した翌1953年に、両者共催で1回展が開かれました。同年8月、写真の公募を新聞に社告として発表すると、2014年の作品が集まりました。11月30日に審査が行われ、12月7日の道新紙上で「自由」「肖像」「観光」「産業」「色彩（スライド）」

「科学」の6部門の入賞・入選が発表されました。

当時はまだ、北海道の写真人口は少なく、技術的なレベルも低かったといわれています。しかし、その後の経済成長と、美しい北海道の自然風土、開発・観光の進展が写真文化と結び付き、本道写真界の実力は充実していったそうです。

「写真道展」も、時代の変化や応募数の増減に応じて、部門の再編、組写真の廃止、一人当たりの応募数制限など、募集要項の見直しを重ねてきました。2012年の59回展は、応募点数が5406点、応募人数も514人と、一般公募が3部門制になった48回展以降で最高を記録するなど、道内の写真人口は着実に増えていきました。

1983年には、「写真道展」30年目を記念して「学生写真道展」がスタートします。これは高校生、専門学校生、大学生を対象にしたコンテストです。1回展で最優秀賞に輝いた学生は、今ではプロカメラマンとして活躍しています。応募者数の低迷で撤退が議論された時期もありましたが、出品料を無料にするなどの改善を図り、2013年の30回展以降は、コンスタントに応募作品数が1000点を上回るようになりました。審査・運営の効率化のため、

2019年からは「写真道展」に第4部という形で組み込み、応募制限も設け一人3点以内としています。

道写協の30周年記念誌には「道展に入選することが、カメラマンの夢であり、勲章」と記されるとともに、「会員になって会費を払っているのに、どうして（写真道展に）入れないんですか」という抗議の手紙が事務局に届いたことや、初めて入選した会員が涙を流しながら喜んだといったエピソードが伝えられています。

カメラメーカーなどが主催する写真コンテストのような賞金や豪華賞品もなく、出品料5000円を支払って参加する公募展が長く続いている理由について、中野会長は「何と言っても全道を代表する伝統ある写真道展に入選・入賞することが写真を志す人にとって大きな喜びであり励みです」と話します。

モノクロからカラーフィルムへの



学生写真道展の表彰式（2013年）

移行、カメラは手動式からオートフォーカスなど自動化と高速連写化、デジタルカメラやインクジェット印刷の登場など写真をめぐる技術革新、肖像権やプライバシー保護意識の高まりに伴う被写体の制限など、さまざまな時代の変遷を経て、なお、「写真道展」は、本道アマチュアカメラマンにとって色あせない、輝かしい目標となっています。

女性アマチュア写真家の 応募数や入賞・入選数増へ

1984年開催の31回展で、入賞・入選総数194点のうち、女性の作品は5点しかありませんでした。1990年代に入ると、女性の応募者が急激に増えはじめます。女性初の会長に就任して3年目となる中野会長が入会した時期と重なりま



女性審査員も増えてきた審査会（59回展）

女性も大勢いました。ただ、初めて表彰式に出ると、圧倒的に男性が多く、カメラは長年、男性の趣味だったことを実感しました。それと同時に、女性の活躍が期待されていることも感じました」と語ってくれました。

近年は、多くの女性入賞・入選者が誕生し、2012年の59回展では72点の女性の入賞・入選があり、全体の約3割を占めるようになりました。

中野会長は、50歳の時に写真教室に通い始め、カメラを通して見る世界が、肉眼とは全く違うことに驚き、感動します。「自分を表現できる手段を得た喜びは本当に大きく、見るものが皆新鮮で、寝ても覚めても写真のことを考えていました」と振り返ります。翌年、道写協に入り、当時最短の8年で審査会員に昇進しました。遠出が難しくなった今でも、中野会長は「1年に1枚でいいから、自分が納得する写真を撮りたい」と身近にある被写体に向け毎日ファインダーを覗き、「日常」を切り取り続けています。

各支部例会の場で 技術を教え、磨き高める

道写協の活動を支える基盤は、全国各地にある支部です。会員は地元

支部を展開しています。

支部の代表的な活動は、会員各自が撮りためた作品を持ち寄る写真例会です。支部によっては毎月、隔月、あるいは年に数回開いています。会員が持ち込んだ作品に対し、写真道展審査会員が画面構成、シャッターチャンスなどの写真技術をアドバイスするほか、会員同士でもそれぞれの写真をじっくり鑑賞、話し合いながら、「次回は私も良い作品を……」と誓い合う、親睦の場になっています。

「たくさん写真を見ることは勉強になるし、刺激にもなります。特に初心者の方は、何をどう撮れば、いい写真になるか、よく分かると思います」と中野会長は支部活動の意義を語ります。

そのほかにも支部では、撮影会、撮影旅行、写真展の開催、入賞作品のスライド勉強会、初心者のための写真教室など、会員の人数や年代に応じた活動を行っています。ただ支



釧路支部創立60周年記念写真展

部の活動も、コロナ禍の影響で停滞し、入会しても何も行事がないのではと去って行く人もいるそうです。

道写協の旭川支部には現在、27人が所属しています。数年前までは20人が切っていたそうですが、白鳥敏昭支部長は「撮影でたまたま一緒になった方に声を掛けるなど、地道な取り組みで徐々に増えてきました」と語ります。毎月第2木曜日に開く例会では、会員が持ち寄った作品の中から、入選作品を決定しています。各会員の年間成績で、年度賞・準年度賞・奨励賞・敢闘賞・新人賞そして最高作品賞を決め、新年会の席で表彰します。そのほかにも支部の展覧会や撮影会などを開催していますが、これらはコロナ禍で中断しているものもあり、白鳥支部長は「より多くの市民が写真文化に触れてもらえるよう、展覧会の際にはダイレクトメールを送るなど、興味を持ってもらえるよ



旭川支部が開いた市民向け写真教室



子どもたちのピュアな感想が響いた 67 回展 (2020 年)

2020年の67回展は、新型コロナウイルスの感染拡大により、例年2月末から3月初めごろに開く審査会が3ヶ月以上延期となり、これに伴い展示会場に予定していた道新ぎやらりーは、使え

コロナ禍を越えて さらなる発展を目指す

2020年の67回展は、新型コロナウイルスの感染拡大により、例年2月末から3月初めごろに開く審査会が3ヶ月以上延期となり、これに伴い展示会場に予定していた道新ぎやらりーは、使え

なくならしました。あちこち会場を探して、都心から少し離れた札幌市民ギャラリーで初めて展示会を開くことにしました。例年より遅い7月28日からの開催でしたが、「1800人を超える来場者がいました。写真道展が皆に愛され、心待ちにされていたことを実感し、本当にうれしく思いました」と中野会長は感想を語ります。

「写真道展」への応募点数は、近年ゆるやかに減り続けています。札幌でもフィルムを現像するラボや写真専門のギャラリーは数えるほどしか残っていません。大変厳しい写真界の環境です。しかし、「写真の魅力は尽きることがなく、日々カメラを手にして美しい北海道の自然やたくましい人々の営みの姿を捉えている会員の存在は大きな力です。北海道の写真文化の向上を目指して、自分たちの展示会は、自分たちが作るという気概のある後継者を育てていきたい」と中野会長は話してくれました。



68回展 第1部「自由」1席 文部科学大臣賞
「あの夏の日」佐野ミヨ (恵庭市)

「写真道展」への応募点数は、近年ゆるやかに減り続けています。札幌でもフィルムを現像するラボや写真専門のギャラリーは数えるほどしか残っていません。大変厳しい写真界の環境です。しかし、「写真の魅力は尽きることがなく、日々カメラを手にして美しい北海道の自然やたくましい人々の営みの姿を捉えている会員の存在は大きな力です。北海道の写真文化の向上を目指して、自分たちの展示会は、自分たちが作るという気概のある後継者を育てていきたい」と中野会長は話してくれました。

「写真道展」への応募点数は、近年ゆるやかに減り続けています。札幌でもフィルムを現像するラボや写真専門のギャラリーは数えるほどしか残っていません。大変厳しい写真界の環境です。しかし、「写真の魅力は尽きることがなく、日々カメラを手にして美しい北海道の自然やたくましい人々の営みの姿を捉えている会員の存在は大きな力です。北海道の写真文化の向上を目指して、自分たちの展示会は、自分たちが作るという気概のある後継者を育てていきたい」と中野会長は話してくれました。

北海道の
天然記念物 ③



佐呂間湖畔鶴沼の
アツケシソウ群落〔湧別町〕

(文と写真・片山健一 取材日2021年9月14、15日)



塩水に浸かる所で育つアツケシソウ (湧別町鶴沼)

ありのままの姿を見せる
サロマ湖群生地

アツケシソウ(学名: *Salicornia europaea*) という和名は、1891年に太平洋沿岸の厚岸湖内の牡蠣島で発見、採取され、札幌農学校(現北海道大学)の宮部金吾教授によって名付けられました。北海道入り江や流水の緩やかな河口に近い川辺など、潮の満ち引きで定期的な冠水するような海水に近い塩濃度になる湿地が最適な生育条件とされ、塩生植物と呼ばれる仲間に入ります。

香川県など瀬戸内海沿岸部にも分布していますが、海岸の開発などによって絶滅した場所もあります。環境省のレッドリストでは、絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)に分類されています。1957年に北海道指定の天然記念物となったサロマ湖畔にある鶴沼の群落は、小さな川を吊り橋で渡った先にあるサンゴ岬の砂州が指定地です(登録名は佐呂間です)。約2万



吊り橋の先に広がる鶴沼の群生地 (写真提供: 湧別町)

平方メートルの広さにわたってアツケシソウが群生しています。アツケシソウは一年草で、5月頃から緑色の芽を出し始め、夏から秋にかけて10センチから30センチほどの高さになり、山の紅葉よりも一足早い9月ごろから茎や枝が赤く色づき、湖畔に赤い絨毯を敷いたかのような光景が広がります。多肉質の茎の形状や色合いから、別名「サンゴ草」とも呼ばれています。

この群生地ではその他の塩生植物の駆除や土を耕すといった特別な保護活動は行っておらず、自然の状態のまま保全しています。例年9月中旬には赤く染まり始めますが、雑草の繁茂や天候の影響で「一年によってあまり赤く見えないこともあります」と湧別町商工観光課では説明します。

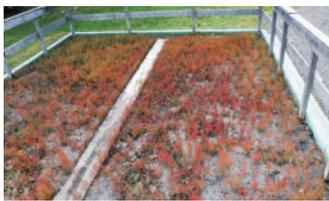
命名由来の地・厚岸
では人工栽培に挑戦

和名の由来となった厚岸湖の牡蠣島のアツケシソウは、発見から30年後の1921年に、「厚岸牡蠣島の植物群落」として国の天然記念物に指定されました。しかし、1952年の十勝沖地震や1960年のチリ沖地震の津波、地盤沈下など

の影響で牡蠣島が水没し、1994年には植物の回復が見込めないという理由で天然記念物の指定が解除されました。

現在も厚岸湖畔の最奥部にアツケシソウは自生していますが、道路がなく、クマも出没する場所のため、気軽に見に行くことはできません。

厚岸町では、町の名が付いた植物を保護し、町民らに親しんでもらおうと、1982年からアツケシソウの人工栽培を郷土館の前庭で続けています。より大規模な栽培にも挑戦しましたが、土壌の酸性化や淡水の流入による雑草の繁茂などで失敗してきました。



厚岸町郷土館前庭の栽培地では海水を汲んで撒いている

今年新たにチカラコタン地区で総事業費約2400万円を投じて、全体面積約1500平方メートルの試験栽培地を造成しました。土質や高低差で生育条件の異なる4区画を設け、2022年春までに種をまき、試験栽培を開始する予定です。

湧別町

湧別は、アイヌ語の「ユベベツ」(鮫の住む川)が語源といわれ、昔、湧別川河口から近海にかけてチウウサメが生息していたことに由来すると言われていました。町花はチューリップで、約200品種70万本が咲き誇る「かみゆうべつチューリップ公園」が有名です。



深紅に色づく湖畔 (写真提供: 湧別町)

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

北海道新聞が伝える

核のごみ 考えるヒント

978-4-86721-029-1

関口 裕士 著・北海道新聞社 編
B5判 64頁 1100円
北海道新聞社 発行 011-210-5744



「核のごみ」とは、再処理した核燃料の廃液をガラスで固めた円柱のことです。加工直後の放射線量は1時間当たり約1500シーベルト、人間が近づき20秒浴びると致死量に達します。無害化するまでにはおよそ10万年かかるため、国は地中深くへ埋める計画です。2020年、寿都町と神恵内村が「核のごみ」を受け入れるための候補地に手を挙げ、同年11月から文献調査が開始されました。本書では北海道新聞が両町村の動きや、幌延町にある幌延深地層研究センターの地下研究施設、フィンランドや青森県の再処理工場にも取材し報道してきた記事が一冊にまとめられています。イラストやグラフを使い視覚的にも分かりやすく、汚染水が並べられている上空写真からは切迫する現状を目にすることができます。インタビュアーは、行政、倫理学、社会学、学生など様々な立場からの視点が語られています。行政の悩み、未来への責任、北海道におけるこの問題を自分の事として考えていくためのヒントが詰まっています。

(生産管理部 蛇見裕子)

熊から造形へ

木彫り熊 未知なるコトで独り言

山里 稔 編 AB判 112頁 3300円

熊学舎 発行 Eメール kumagakusya@gmail.com



あなたは木彫り熊と聞いて何を思い浮かべますか？

北海道土産、アイヌ文化、はたまたアート作品、といったところでしょうか。「知ってはいるけれども実物を見たことはあまりない」という方は大半だろうと思います。少なくとも日常生活ではあまり見かけないのではないのでしょうか。

本書は造形作家である著者が収集してきた木彫り熊の研究書です。一般的に知られる木彫り熊とは「全国的に有名な北海道土産の一つ」ですが、その実、アイヌをはじめとした様々な人々が個々の流派によって継承、磨き上げてきた、歴史と深みのあるアート作品でもあります。

時代によって木彫り熊のスタイルにも流行りや廃りがある事や、流派によって彫りの技法が全く違う事など、木彫り熊の歴史を通して、北海道の歴史や職人たちの軌跡を細かに解説しています。木彫り熊の奥深い世界を堪能できる一冊です。この機会に触れてみませんか。

(枚葉印刷部 酒井陽羽)

おいしく つくろうよ

978-4-87739-364-0

東海林 明子 著 A4変型判 84頁 1430円
共同文化社 発行 011-251-8078



ステイホームが叫ばれる社会の変化と共に、今改めて家庭料理が注目されていると感じた著者が「家で料理づくりを楽しめる本」として、10数年ぶりに出版した新作レシピ集です。

青空に美味しい料理を乗せた雲がアカプルコと浮かぶイメージの鮮やかなカバーが印象的な本書には、「いつもの食卓を簡単においしく」「ときには手間ひまかけておいしく」「一緒につくっておいしく」「アザートやおやつもおいしく」の4つのテーマに沿った全83品のレシピが収録されています。その多くは料理初心者でも気軽に作ってみたい、と思える身近な食材や調味料を使ったシンプルなものです。

ページをめくるたび、美しい料理写真が現れ、おしゃれなテーブルコーディネートにも目を奪われます。トレードマークであるエプロンのコレクションや、ライフスタイルを垣間見ることのできる調理用具の紹介も必見。著者の穏やかな人柄まで伝わる、温かみのある美味なる本です。

(北海道営業部 伴 清佳)

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード(I S B N)及び雑誌コード。特記以外は税込価格。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

北海道遺産完全ガイド

佐藤 圭樹 著
A5判 208頁 1870円

達人が教える② 認知症と介護

北海道新聞社 編
B5判 96頁 1320円

特別報道写真集 東京オリンピック2020

共同通信社 制作
A4判 192頁 1650円

世界遺産 北の縄文

北海道新聞社 編
A4判 64頁 1430円

キャンサーギフト 礼文の花降る丘へ

柚田 美野里 著
A5判 96頁 1760円

消えた「四島返還」 安倍政権 日口交渉2800日を追う

北海道新聞社 編
A5判 312頁 1980円

すゝい離乳食

熊谷 しのぶ 著
A5判 88頁 1540円

ミンタラ① アイヌ民族 27の昔話

北原 モコトウナン 編著
小笠原 小夜 絵
B5判 152頁 1980円

道新プラス 道新受験情報 2022高校入試 合格データ特集

北海道新聞社 編
B5判 282頁 880円

北海道新聞社
〒071札幌市中央区大通西3-6
011-210-5744

アンビシヤス韓国語 入門編

金昌震・韓然善・趙恵真 編著
B5 114頁 1980円

北海道大学出版会

〒060札幌市北区北9条西8丁目
011-747-2300

さつぼろ燐寸(マッチ)ラベル グラフティ

上ヶ島 オサム 著/和田 由美 編
B5変型判 168頁 2200円

亜璃西社
〒063札幌市中央区南2条西5丁目
011-221-5396

おばけのマールとモーニングのあど

けいたろう 文/なかい れい 絵
A4変型判 24頁 1320円

最果ての向日葵 俳人 藤谷和子に聞く

松王 かをり 著
四六判 228頁 1760円

海外好き公僕技官のビール紀行

吉井 厚志 著
四六判 233頁 1430円

旭川歴史市民劇 旭川青春グラフィティザ・ゴールデンエイジ コロナ禍中の住民劇全記録

那須 敦志 著
A5判 287頁 1980円

人生の成就

澤田 展人 著
四六判 428頁 2420円

豊かに働き、すてきに生きる 自分を磨くあなたに贈る30の応援メッセージ

石田 邦雄 著
四六判 270頁 1650円

中西出版
〒072札幌市東区東雁来3条1丁目-34
011-785-0737

酪農の鳥獣被害対策ハンドブック

古谷 益朗 監修
B5判 164頁 4819円

デーリイマン社
〒005札幌市中央区北5条西14丁目
011-231-5261

北海道・東北史研究2021 [通巻第12号]

北海道・東北史研究会 編
B5判 132頁 2200円

北海道出版企画センター

〒001札幌市北区北18条西6丁目2-47
011-737-1755

朝鮮人「徴用工」問題を解きほぐす

室蘭・日本製鉄釜山製鉄所における外国人労働者「移入」の失敗
木村 嘉代子 著
四六判 212頁 2090円

寿郎社

〒007札幌市北区北7条西2丁目
011-708-8566

中国を感じる

斎藤 憲二 著
四六判 224頁 1430円

柏繪舎
〒002札幌市中央区北2条西3丁目
011-219-1211

爪@天空のスケッチ

青木 曲直 著
100頁×74頁 232頁 500円

ビジネスモデルの経営学

関根 勇 著
A5判 260頁 2200円

共同文化社
〒003札幌市中央区北3条東5丁目
011-251-8078

紙のよこば

花魁淵 佐藤 一 著
木版画 50センチ×75センチ

札幌市南区にある藻南公園の景勝地である。昔は豊平川河畔の中で最も深く、清らかな「よどみ」であった。明治の末期、吉原から身請けされてきた花魁が淋しさに世をはかなんで、身を投じたという話からこの名前がついたと言う。

夏には、清流で川遊びができる。
全道美術協会(全道展)会友 札幌市在住



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL <https://iword.co.jp>